



もてなしの心で語る わが街

えな自慢

えな自慢
えな業 61

恵那シクラメン

国内栽培発祥の地



▲シクラメンは、篝火(かがりび)花とも呼ばれる

ひと口メモ

恵那・中津川地域は、種苗しゅびょうの全国シェア8割以上を占めるほどの一大産地として成長し、現在、岐阜県はシクラメン種苗生産量は日本一。市内では、長島町久須見地区を中心に栽培されている。

大正時代に故伊藤孝重こうじゅう(東野)が日本で初めてシクラメン栽培を開始。この地域で栽培されたシクラメンを「恵那シクラメン」と言う。伊藤孝重は、1896(明治29)年、東野の養蚕農家ようさんに生まれ、上田蚕糸専門学校さんし(現信州大学繊維学部)の修学旅行中に会ったシクラメンに魅せられ、当時大井ダムの建設に携わるアメリカ人技師の奥さん(ドイツ人)の勧めで栽培の道に。日本での栽培は大変珍しかった時代に独学で取り組み、昭和初期には成功。その後、自ら販路を拡大し、恵那を全国に誇るシクラメン産地に育てた。



▲市街地では、毎年12月にシクラメンまつりを開催

えな自慢
えな業 62

奥矢作レクリエーションセンター炭焼き窯

日本一大きい窯

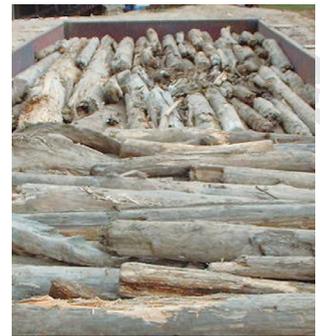


▲炭焼き窯の空気の調整窓

ひと口メモ

NPO法人奥矢作森林塾は、恵南豪雨災害をきっかけに、荒廃した山林を再生し、地域の暮らしを見直すため設立された。空家を再生し活用する塾の開催や、田舎暮らしを体験できる宿泊施設の運営など、都市と農村の交流を深める活動をしている。

この窯は、縦10疋、幅3疋、深さ2疋、容量60立方疋(大型ダンプ11杯分)で、炭焼き窯としては日本一。岐阜県、長野県境から愛知県を流れる一級河川矢作川上流の矢作ダムには、毎年約600立方疋もの大量の流木が流れ込む。中には切り捨て間伐材も含まれる。ことに、2000(平成12)年の恵南豪雨(東海豪雨)災害では、流木が湖面を埋め尽くし、対岸まで歩いて渡れるほどであった。流れ着く全ての流木を炭にすることを目的に、奥矢作レクリエーションセンター下の湖畔に炭焼き窯を築造し、2007(平成19)年から稼動。炭は、床下の湿度を調整する床下調湿材、土壌改良材、河川の水質保全材として使われている。運営はNPO法人奥矢作森林塾が行っている。



▲炭焼き前の流木

次号は1月1日号
発行日は12月21日(水)です

広報えな No.164
2011年(平成23年)
12月1日発行

発行 恵那市役所/編集 企画課広報広聴係
岐阜県恵那市長島町正家一丁目1番地1 ☎(0573)26-2111/☎25-6150
<http://www.city.ena.lg.jp/> ✉info@city.ena.lg.jp

『広報えな』12月1日号、1部当たりの印刷経費は約12.9円(税込み)です。



◀市安心安全メール配信システム(登録用QRコード)
市WEB版文字放送システム(閲覧用QRコード)
□問い合わせ 防災情報課(内線317)



『広報えな』は環境に優しい再生紙を使用しています。
この印刷物は石油系インキではなく、地球に優しい植物油を使用したインキで印刷されています。

